生徒指導上の今日的課題とその対応
― 性非行の事例とその指導からの一考察 ―

岩澤　啓子

1　はじめに

古くから使われてきた「最近の子どもたちは‥‥」という言葉は，今でも耳にします。しかし，時折「今どきのおとなは‥‥」という言葉に出会うことがあります。明治以降，社会環境の変化が次第に顕著となり，とりわけ昭和20年の敗戦後は人々の価値観が様変わりし，いわゆるおとなと言われる人々はその環境で育つ子どもたちを理解できず，ましてや指導しにくい存在であったようです。かつて新人類と称された世代がおとなとなり，遂に「今どきのおとなは‥‥」という表現を生んでいるのではないでしょうか。そして教育現場に現れたのが「モンスターペアレント」です。今も増殖中などとマスコミ等では騒がれておりますが，組織の中では異物視されているこの現象も，いずれは一つの地位を示すことになるでしょう。

また，ハイテク産業の急速な発展のマイナス面を，生徒を介してそのあおりを正面から受け止めざるを得ない学校教育，とりわけ生徒指導の課題は，いずれは社会的問題としてクローズアップされる可能性が大きいと思われます。生徒指導上の今日的な諸課題は，いずれも技術的に解決できる性格のものではなく，生徒を健全に育成するためには学校・家庭・地域社会，並びに関係機関との連携・協働が求められています。

しかしながら，家庭や地域社会の教育力の低下が叫ばれている昨今，学校は以前にもまして「児童生徒の豊かな成長」に大きな役割を担う場となっています。この教育現場に加わり，役割を果たし得る教員の養成，さらに教員免許更新講習の開設等に任じ教員の質的向上の一翼を担っている本学も，重大な役割を果たさなければならないと思っています。

平成22年２月，機会を得て北海道遠軽市にある社会福祉法人北海道家庭学校を訪れ，学校長の加藤正男先生のお話を伺うことができました。このような児童自立支援施設に入所した子どもたちは，家庭の疑似体験的な集団生活を軸に一定の教育を受け，その多くが立ち直りを示しているそうです。この施設に入所するまでに至る原因は様々ですが，入所した子どもに面会に来る保護者は極めて少ないとのことで，私は棄民的な感じさえ受けました。問題行動を起こす子どももまた，社会や家庭の歪みの中で自分の存在を不器用に主張していた子どもであることを痛感しました。

本稿は，児童生徒の問題行動の背景となる時代の推移，発達段階に伴う問題行動の特徴，並びに女子生徒の非行，とりわけ性非行について論じた後，性非行を繰り返す女子生徒の指導事例を提示するとともに，学校における「性教育」を概観することとしました。生徒指導の事例は概ね成功例となっておりますが，今回の事例は結果的に成功であったか否かは定かではありません。しかし，筆者を含めた関係者が生徒指導のために多くの人々等とかかわり，膨大な時間とエネルギーを費やして行った姿の一つを示し

ています。

2　子どもの問題行動，時代背景を探る

子どもは好奇心が強く，急速に成長するものです。私たちが「子どもを理解する」などと言いながら悠長に子どもたちを眺めていると，昨日とは別の顔を持った子どもがそこにいて驚かされることがしばしばあります。特に中学生になると，おとな社会への憧れや生活行動を束縛する規範への反発などの意識が交錯し，時には自分で自分をコントロールするのが難しいほど情緒不安定に陥るなどの第二次性徴期に突入してきます。

しかし，子どもの発達段階に生ずるこれらの自然な現象が，歪んだ環境を誘因として非行等問題行動の原因となるおそれがあることも否めない事実です。

(1)価値観の多様化などと言っていられない現状

家庭や地域社会が大きく変容し，その結果人間関係が急速に空洞化してきていると言われています。最近でも「○○は，こうあるべきだ」「これがあるべき筋だ」と主張する向きもおりますが，そのような姿は目立たなくなりました。時代が生んだ多様化した価値観は，当分それらが集約されるという動きも，残念ながら寡聞にして耳にしておりません。

特に「性」に関する世代間の価値観（モラル）の差異は大きく，建設的な対話の場すら設けるのが難しい環境にあります。さらに，一部マスコミによる面白可笑しく取り上げた「性」に関する話題は若者の関心を呼び，「性」は愛情の問題ではなく生理現象に過ぎないとあからさまに主張する見解すら生まれており，これに力を得た一部の者は，社会規範から大きく逸脱する行動に走る状況も認められています。

また，子どもたちの置かれている生活様式も大きく変化し，子どもが親の仕事（家事労働等）を見たり手伝うという当たり前であった習慣が失われつつあります。子ども部屋という個室を与えられ，孤立してしまった子どもも生まれています。友達化した新しい親子関係は，親として本来言わなければならない注意やしつけを避けた「自覚なき放任型」とも言うべき親が増えているのも事実です。ホームドラマの真似事のごとく子ども部屋を与えて見せかけの自立を期待しても，子どもとの距離はどんどん大きくなり，親と子の関係が実態を失って，いわるゆ家庭崩壊が少なからず生じてきました。家族が一台のテレビの前に集まっていた時代に生まれた「チャンネル争い」という言葉も死語となり，茶の間にある電話の話し声を聞きながら家事をする母親もいなくなりました。

特に携帯電話の急速な普及には，大人もその利便性と流行に乗り遅れまいとする心理が働き，必ずしも必要性は無くてもとりあえず購入し，所有していることにより安心感を得ている人々もおります。機器の性能向上と相俟ってインフラが整備され，今や子どもに電話を持たせて塾の送り迎え，写真が撮れて・メールができて・切符が買えて・・まさに携帯電話はコミュニケーションツールとして存在しているだけではなく，生活必需品としての地位を高めてきました。そして，自分をはるかに超えた技能でこれらの機器を自在に駆使する我が子に，頼もしさを感じている親も多いと思います。

しかし，そこには親子関係が崩れる一因とも考えられる落とし穴がありました。携帯電話やパソコンが子ども社会に普及すると，子どもは世代や年齢とは関係なくおとなと同じ情報を共有することになります。情報の氾濫する中でいつの間にか経験則の重要性がないがしろにされ，社会経験の少ない子どもたちは総合的な情報処理能力を持たないまま自分に都合よく理解していくようになります。携帯電話やパソコン等の機能に関する知識に疎い親たちは，子どもの行動を制御することが出来なくなり，モバイルを介して未知の社会や不特定多数の人とつながりをもつ子どもが全く見えない存在になってしま

いました。「うちの子に限って‥‥」「うちの子を信じていますから‥‥」と語る親は，「うちの子が何を考えているのか分からない」「うちの子を信じたい」と悩める親よりも極めて危ない淵に立っているのかもしれません。

子どもが家出をして所在が分からなくなったときに，私は警察に『捜索願い』を出すよう親に勧めます。子どもが帰ってきたとき，親の心配の気持ちを代弁してくれる行為だからです。そのとき子どもに「余計なことをした」「なんで警察などに行ったのか」と反発されても，子どもが大人になったとき，さらに親になったときに，いずれは親が我が子を思う気持ちが理解されるための先行投資ではないかと思うからです。しかし，携帯電話が普及してから親の行動は変わってきました。子どもの家出を心配をしても，警察に『捜索願い』を出すことはためらうようになりました。「とりあえず携帯電話を持たせているから‥‥つながるから」と自分を納得させ，ジッと待つだけの親が多くなったのです。子どもが帰ってきて，親のとった行動を批判し反発することを恐れると同時に，携帯電話でつながっているからというかりそめの安心感で自分の気持ちを慰める親が生じてきたのです。親のコントロールが失われ，恣意の海に放たれてしまった子どもの存在を，親自身が創り上げてしまったことになります。

子どもから「机の上は触らないで」「私の部屋に入らないで」「携帯電話を勝手に見ないで」と，覚えたてのプライバシーという言葉を強調してまくし立てられると，親は子どもとトラブルを起こしたくないという気持ちが働き関与しなくなります。その結果，子どもの交友関係や行動の実態が把握できなくなります。中学３年生の女子生徒が数人で家出をしたため，該当する生徒の保護者が学校に集まり話し合いが携帯電話に及んだときに，一人の母親が小さい声で話し出しました。「携帯電話を買い与えたときに，子どもといくつかの約束をしました。でも，それが守られたのは３ヶ月です。後は高額の請求書が来るし咎めれば『バイトをするよ（学校ではアルバイトは禁止されている）』と脅してくるし，帰宅が遅いので心配して電話をかけても都合が悪ければ出ないし‥‥，持たせたことに後悔しています。今は子どもは『携帯命?』で，取り上げたら何をするか分かりません」と話した親の言葉に，他の親も黙ってうなずいておりました。子どもの変容を携帯電話のせいにして自分を納得させたい親の気持ち，これも子育てにＳＯＳを発している親の信号かと思うと気の毒になりますが，親が利便性を求めて持たせた携帯電話によって，子どもたちは様々な問題の被害者や犯罪の加害者にもなる紙一重のところに置かれていることを親たちが，また社会全体がその緊急性を理解し，早急に改善策に取組まなければならないという剣が峰にきているのです。問題が発生し，そのことに親が気づいたときには，親と子の間には埋まらないほどの深い溝が出来ているのが実態ですが，親はある意味では自分たちの子どもに対する加害者であるかもしれないという意識が生まれれば，いずれは現状の溝を埋めることができるのではないでしょうか。

⑵発達段階で生じる非行の特徴

①小学生

地域に荒れた中学校があると，小学生は中学生の問題行動に憧れたり真似をする者が少なからず現れます。また，兄姉が怠学や喫煙，万引きなどの問題行動に関わっていると，その弟妹は幼くして兄姉の言動を模倣していきがちです。このように問題行動の低年齢化は，周囲の環境が大きく影響しているように思われていました。

しかしながら，文部科学省の『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』によれば，近年このような地域環境や兄姉の影響云々にかかわらず，暴力行為が小学生に年々増加の傾向にあることが発表されました。全国で年間5000件を越す小学生の暴力行為は，「切れる子の出現」「我慢できない子の増加」「感情の

コントロールができない子の増加」「コミュニケーション能力の不足」「規範意識の欠如」などを挙げて社会的問題であるとしています。

低学年の子どもは，自分の思うようにならない気持ちを制御できずに相手を叩いたり蹴飛ばした場合の多くは相手が泣いて訴えるので，教師はすぐに気づくことができ，状況を把握して指導を行えます。中学年の頃になると，自己中心性の強い子や爆発性などの傾向をもった子どもは日常の生活の中で把握できるので，乱暴などの行為がなくとも機会を捉えて個に応じた指導を行い是正を図っています。しかし，高学年になると体格が良くなり自分の存在感を暴力をふるうことによって誇示し，時には注意や指導をする教師にまで暴力で反抗する者も生じてきます。その対応や指導に課題を残すと，中学校に入ってからも教師不信や学校不信・おとな不信は増し，その不信が非行等問題行動の誘因であることが認められております。

小学生で起こす教師への暴力的反抗には，保護者やスクールカウンセラー，部活動の顧問等と連携して，居場所づくりや帰属意識が持てるようなフォローをしていくことが極めて重要です。暴力行為をする子どもの背景には，先輩や友人から影響を受けたり家庭や地域の環境等で身に付けた性情から攻撃的な行動を起こすこともありますが，その他に発達障害等特別な教育的支援を必要としている子どももおりますので，実態に合わせた対応が求められています。

また性への関心を持つ時期は，個人差はありますが小学校４年生ごろからです。異性への関心を抱き，学年が進むに連れてその気持ちが強くなり，言動にも現われてきます。小学校４年生で初潮を経験する女児がいることを思えば，自然の成り行きとも思われますが，この時期からの性教育の重要性がその後の子どもの生き方に反映してくることを，おとなが自覚する必要性を感じています。

②中学生

小学校とは大きく変わる環境の変化に対応できずに，ある者は逃避的態度に陥ったり，またある者は過度に自己を主張するためか暴力的な行動をすることがあります。これまでは，これらの多くは若干の時間を経て解消されていました。しかしながら，近年名付けられた『中１ギャップ』が一過性のものとならず，生活環境の変化や学習内容の変化に適応できずにそこから派生しがちな不登校やいじめなどが全国的に多数発生し，既に社会的問題として論じられる状況が生じるなど，かつての五月病に類した状態が中学１年生特有の現象として起こっています。

中学生の問題行動は，授業エスケープ，授業妨害，いじめ，喫煙，不良交友，性的逸脱行為，飲酒，薬物乱用，深夜徘徊，家出，暴力行為，万引き，バイク盗，恐喝など様々です。一般に“非行の入り口は喫煙から”と言われてきました。そのステップは，タバコを隠れて体験する，仲間が出来集団行動のはしりが授業エスケープ，さらに飲酒やシンナー等を経て薬物に手を伸ばし，その間には他校生や先輩との繋がりが出来てバイク盗，無免許運転・・などを重ねて問題行動の悪質化が進むというパターンが定着していました。その“非行の兆しは喫煙から”のパターンが近年大きな変化を示し，最近では「ある日突然型」の問題行動が目立つようになっています。

非行の段階的パターンが崩れた理由の一つに煙草販売の規制が厳しくなったこともありますが，大きな役割を果たしたのは携帯電話の普及です。子どもが携帯電話を持つことによって，“非行の兆しは喫煙から”の伝説は過去のものになりました。子どもたちには，顔の見える友人から顔の見えない友人まで，モバイルの中にぎっしりと詰めており，時と場合によって自分を使い分けることもしています。このことは，非行などの問題行動を含めて子どもたちの“今”が教師や保護者には見えなくなってしまった現実を認めせざるを得なくしました。

これまで問題行動の全く認められていない男子生徒と女子生徒が，写メールで自分の下半身

の写真を撮って送り合ったという出来事がありました。関係者が注目したのは，生徒たちはその行為が「恥ずかしいことである」とは認知していたものの「いけないことだ」という意識は全くなかったことです。当然ながらその行為は二人だけの秘密とはならず，それからそれへと拡大してしまう恐れがありました。それこそ手ぐすねひいて待つ犯罪者等の罠にかかり，徐々に身動きが出来なくなってしまう可能性が高かったと思います。周りのおとなが気づいたときは既に手が付けられない・・「ある日突然型」の発生です。

学校間抗争も，携帯電話が子どもの所持品になってからその姿が変わりました。以前は突っ張り風の恰好をした子どもが数人で相手校へ偵察に行くところから始まりました。この場合，だいたいが塾で関係を作った範囲で行動をしますから，その多くは周囲のおとなや教師がすぐ気づいて相手校と連絡をとり，情報連携をしながら未然防止に努めることができましたので，派手な喧嘩にならずに済んでいました。

とにかく彼らは目立つ恰好が好きで，その恰好で学校や教師の前をうろうろするわけですから，「こちらを振り向いてくれ」「これからアッと驚くようなことをやるぞ」と言わんばかりで，発見しやすかったのです。しかし，最近は携帯メールが飛び交うだけで実態が見えず，生徒の雰囲気がおかしいと気づいたときはすでに学校の近くの公園に，抗争を目的とした他校生が50人，100人と集まって来ているということになります。そのほとんどがモバイルを使用しているのですからなかなか教師には分かりません。異変に気づいたときはすでに事件・事故に発展しているケースが多いのです。しかも，「ネットで見たから」と面白半分に参加してくる子どもたちもおります。あわよくばそこで暴れて一旗揚げようという野望をもったグループもいます。集合した子どもたちの学校相関図を作成しようと思っても，無関係で成り立っていることもありますから厄介です。ネットいじめ，学校裏サイト，エンコー（援助交際），売春，覚醒剤・・この単語のすぐ裏には，携帯電話が潜んでいるのです。

特に性的逸脱行動に走った女子生徒は，「金銭感覚に鈍感」「派手な言動」「ブランド品志向」「ルーズな生活」「刹那的な考え」など別人にでもなったかと思えるような偏った思考に陥ることがあります。これまでも，おとなが子どもの携帯電話の有害情報にフィルタリングを決断したとき，すでにその効果は万全なものではなくなっていました。出会い系サイトの規制法ができても，それに代わるサイトは形を変えて次々と作られていきます。携帯電話のゲームサイトや自己紹介サイト（プロフ）など「非出会い系サイト」を通じて犯罪に巻き込まれる子どもが，平成22年上半期で600人を超えたという報道に，もっとおとなは危機感を感じなければいけないと思います。思春期のとば口，おとなへの憧れ，背伸びしたい行動等の弱点を悪用した携帯電話の闇ともいうべき部分に，操られているのが今の中学生なのです。

③女子の非行の兆し（特に性非行）

中学生は，男子に比べて女子の方が感情が鋭敏であるように思われます。ちょっとしたことで寂しさや疎外感を持ち，虚実の判断なしにただ優しくしてもらえたとして見知らぬ男の人にでも好意を寄せるなど，無防備の姿を見せています。そして，平素は喜怒哀楽に支配されている時期でもあります。したがって，折々の悩みについて何とか心の歪みを正していきたい，助けて欲しいとの信号を発している筈なのです。そのことに親や教師が敏感に気づき，受け止めて早期に適切な対応を行うことが求められております。

ア　態度や行動

・親や教師を避ける　・虚言や言い訳が多い　・隠語や流行語を使う　・学校内で孤立し少数の類似者と群れを作る　・携帯電話を手放さない　・性的な興味や関心が強い　・教師や親から見ても不審な行動をす

る　・帰宅が遅くなり，また夜間外出が多くなる

イ　持ち物や装飾など

・不釣り合いな高価なバッグなどを持つ

・小物が増える　・アクセサリーを身につける　・携帯電話をよく買い替える　・複数台の携帯電話を保持　・頭髪を加工する（染色，パーマなど）　・眉毛を剃る　・化粧をする　・ピアスを付ける　・タトゥーを入れる　・露出的服装を好む

3　性非行を繰り返す少女Ａ（中学３年）の事例

(1)問題行動の発覚

私は当時，校務分掌で中学校の生徒指導専任教諭でした。新学期が始まって間もない4月27日，学級担任から３年生になってから急に遅刻や欠席が目立つようになった女子生徒Ａ（以下Ａ子）について相談を受けました。早速Ａ子の面接を行ったところ，中学２年生の夏休みに上級生の男子生徒に誘われ喫煙やシンナー吸引を行ったこと，11月にはシンナー吸引をしながら性行為を迫られ，それを契機にその後は不特定多数の男性10人ぐらいから誘われれば関係を持つという生活をしているとの話を聞き出しました。Ａ子は，電話を介して知り合った男性と性行為をして口紅やアクセサリー等の小物を買ってもらってはいるが，お金は受け取っていないので売春をしているわけではないと信じています。したがって，お金を稼いでいないので自分の性行為等についての罪悪感は全く持っていませんでした。性行為を繰り返すようになってから妊娠の心配は何度かあったが，いづれも月経の遅れ等であったのでこれまで妊娠はしていないと，淡々と話すのでした。

３年生進級のクラス替えでＡ子の親しい友人はいなくなり，ちやほやしてくれる他校の先輩たちと遊ぶ方が楽しくて，放課後は制服を着替えると急いで先輩たちが集まる場所に出かけるようになりました。帰宅が深夜となることもあり，その結果として朝起床できずに学校へは遅刻や欠席が多くなってしまったとのことでした。

(2)Ａ子を取巻く異性交遊の軌道

４月27日の面談では事の重大性を感じていないＡ子に一抹の不安を感じたが，反面素直に話すＡ子に反省の気持ちを思いやって，次回の面談日を約束して別れました。私は，この情報を学級担任を交え生徒指導部会で報告し，Ａ子の指導対策を協議しました。並行して学級担任は保護者と連絡を取り合いましたが，母親の体調が思わしくなくＡ子の問題行動の伝達のみで終わり，今後の指導について話し合うまでには至らなかったということでした。さらに29日から大型連休に入ったため，Ａ子の行動を把握することが難しくなりました。

以下は５月14日，登校したＡ子から「妊娠したかも知れない」と告げられ，学習も手に着かずに狼狽する男子生徒２人を学級担任と共に面接を行った際に得た，彼等とＡ子との不純異性交遊の状況です。

①５月４日‥放課後Ａ子は男子生徒２人と教室に残り話しをしているうちに，Ａ子が性交体験があることを話し出した。そのうち一人（以下Ｂ男）がＡ子の胸を触るなどのいたずらを始めると，もう一人（以下Ｃ男）も同じようにいたずらに加わった。

②５月６日‥Ｃ男の家は共働きで昼は留守家庭になるためＣ男の家にＡ子，Ｂ男と同じクラスのＤ男も集まり，３人はＡ子との性行為を行う順番をジャンケンで決めた。Ｄ男，Ｃ男の順に隣室でＡ子と性行為を行ったが，Ｃ男はＢ男に「３番目だと気持ち悪いから止めた方がいいよ」と話したため，Ｂ男は関係を持たなかった。

③５月７日‥Ａ子，Ｃ男，Ｄ男が学校を休み，Ｄ男の家に集まった。Ｄ男の両親は共働きである。祖父母と同居しているが，二世帯住宅の構造で日頃からあまり干渉し合わない生活をしているので，祖父母は同じ家屋に住んでいても孫

（D男）のずる休みや孫の部屋で中学生がいかがわしい遊びを繰り返していることには最後まで気づかなかった。この日もA子とD男が性行為を行った。

その後は，D男の家が子どもたちのたまり場となった。

④5月8日‥放課後，D男の家にA子，C男が集まり喫煙・飲酒を行ない，A子とD男が性行為を行った。

⑤5月9日‥放課後，A子，B男，C男，D男が喫煙・飲酒を行ない，またA子とD男が性行為を行った。

⑥5月11日‥放課後，A子，B男，C男，D男と同じクラスのE子が加わり，喫煙・飲酒・シンナー吸引を行った。A子とD男が性行為を行った。C男はE子にいたずらを仕掛けたが，E子が拒否した。

⑦5月14日‥A子は生理予定日が過ぎても生理の兆候がないため，登校してからC男に妊娠の可能性を告げた。D男は常にコンドームを使用していたため，コンドームをしなかったC男に声をかけ状況を告げたとのことであった。C男は傍から見ても分かるほど脅え，すぐにD男に相談すると，D男もまた平常心を失い取り乱した様子が明らかであった。

挙動不審なこの2人を学級担任が声をかけて相談室に連れてくると，「大変なことになっちゃった。どうしよう。どうしよう。」と，身を寄せ合って小さくなっていました。学級担任がさらに問うと「もしかしたら父親になるかもしれない」「高校へはもう行けないよ」と小さな声で繰り返し呟いていたそうです。

男子2人が青天の霹靂のごとく小さな命が宿ったかもしれないことに脅え狼狽えているとき，一方のA子は常に変わらず他の友人と大きな声で元気に笑っていました。このときのA子は，家庭での寂しさを異性との肌の触れ合いで満たし，その快楽の中に自分の居場所を見つけていたように思えます。

それにしても，性に興味と関心を抱く思春期の子どもたちが1度性行為を体験してしまうと，羞恥心や抑止能力がなくなり性欲は止まることを知らずにのめり込んでいきます。その様を垣間見るだけでも，学校教育に性教育を取入れたことの必要性を再確認させられました。

(3)A子の背景

①家庭環境

家族構成は，父56歳，母54歳，兄26歳の4人家族。父親は年取って生まれたA子を溺愛してきたが，中学3年になって急に大人びたA子の気持ちは理解できずに遠くから眺めている状況にあった。母親は病弱で，A子が中学に入った頃から入退院を繰り返している。兄は年齢が離れているせいかA子にとって兄妹という意識ではなく，家におとなが3人いると感じていた。しかしながら，病弱な母親に代わって家事を手伝うという気持ちは少なく，家族への帰属意識は希薄である。孤独を持て余し，人恋しさによる不満を常に感じているA子であり，父と兄に対しては異常なほど憎悪の気持ちを抱き，彼等はA子にとって疎ましい存在であった。

②中学校生活

成績は中位。2年生の夏休み直前に初めてパーマをかけて登校した。その前後から，派手なものや異性の先輩に憧れはじめた。夏休みに入り，問題を起こしている上級生グループに誘われて行動を共にする中で，喫煙，シンナー吸引，異性交遊を経験し，毎月のように妊娠を心配しながらも誘われれば性行為を続けてきた。部活動はバドミントン部に所属していたが，2年生の9月頃から欠席が目立ちはじめて退部している。3年生に進級してからは遅刻・欠席が多くなり，担任がその都度注意を行い指導をしていた。母親はA子の無軌道な生活を気にしながらも，自分の入退院生活で指導やしつけはできず，辛うじてお金（小遣い）で親子のかかわりを繋ぎとめていたようである。当然ながら，学校生活のことや家庭学習にはまったく無関心で，A子と

向き合って話し合うこともなかった。次第にA子は，家庭での疎外感を無意識のうちに異性との性行為をとおして補っていたようである。

４月27日にこれまでの問題行動が発覚してからは，組織的な指導体制のもと教員全体で情報を共有し，学級担任を保護者対応の窓口としながら私はA子への指導を行っていきました。しかし家庭のA子の行動への抑制作用はほとんどなく，不特定多数の異性との関係は性癖化していたように思われました。

③小学校生活（５・６年生時の担任談から）

特に問題となるような行動は何も起こしてはいない。しかし，学級担任から見て「何となく気になる子」であり，「常に見ていなければ心配な存在の子」であったそうです。歌手を夢見たり，少女雑誌の主人公に憧れるなど気分的に浮ついた面があり，他の児童より服装や言動が派手であった。しかし，宿題等はきちんと提出し，生活面も注意をすれば素直に従っていた。

友だちは大勢いたが金遣いは荒く，一部の児童からは批判を受けていた。家庭的には決して裕福ではないと思われるが，A子の持ち物は常に新しく，着ているものは少女雑誌のモデルが用いるような洋服が多かった。両親は，金銭的に不自由なく育てることが大切であるとの認識であったようだが，見方によってはお金がA子との親子関係の維持の要となっていたとも言えそうです。いずれにしても，愛情欠乏症であったことはうかがわれます。

A子は小遣いで文房具や小物を買い，友だちにプレゼントをしています。親がお金でA子の心を引き留めていたのと同様，A子もまた同じようにプレゼントで仲間を引き留めようとしていたのでしょう。

⑷性非行の発覚（５月14日）から夏休み前までの指導の経過

①A子‥A子が妊娠しているか否かを確認するために母親と協議した結果，母親がA子を伴って産婦人科医の診察を受けさせることになりました。事ここに至っては，母親もこれまでのように無関心ではいられなくなったので，学級担任は一歩さがって母親を補佐する役割を担いました。A子は通院加療を要することとなり，ここで初めて事の重大性に気づいたようでした。そしてA子の口から「もう二度と病院に行くようなことは嫌だ」という言葉が出るほど病院での診察や医者からの話には衝撃を受けたようです。性非行の立ち直りに専門医の力を借りるのは効果的であることを実感しました。

私は，A子に寄り添うべく会話ノート（交換日記）を提案しました。最初は書くことを嫌がるA子でしたが，簡単な質問の反復を継続した成果か徐々に答えを記入し始め，ノートを提出するようになります。しかし，まだ自分の気持ちを積極的に綴ることはなく，単に質問に答えているだけの段階でした。

②C男‥保護者に事の顛末を説明すると，父親は「性の問題は常に男が加害者である」と言い出してA子の病院の費用や慰謝料の問題に話しを進めました。しかし，学校ではいずれが加害者または被害者として扱って問題の解決を図るのではなく，今回の問題を保護者の目で直視し二度と起きないように学校の指導に協力していただくことを納得してもらいました。特に，留守家庭における子どもへの気配りや親子の対話などを中心に協議を重ねました。私は，C男とも会話ノート（交換日記）を始めました。

母親は店舗を経営していたが，店を他人に譲り専業主婦として家庭に入りました。子どものために留守家庭を精算したのです。親の真剣な取組みに心を動かされたのか，C男はA子との性行為への興味と関心から離れて部活動に努力を傾けていきました。

③D男‥彼は運動能力に優れ，上級生になってバレー部のレギュラーの座を獲得しています。しかし連休直後に部活動を休みだし，顧問から呼び出されていたところに今回の件が発覚しました。そこで顧問と相談し，D男の立ち直りへ

の支援は私との会話ノート（交換日記）に加えて顧問との定期面接を行うことになりました。D男の保護者はＰＴＡ役員でもあったので来校時には私とも面談をして，情報交換を行いました。指導後D男は再び部活動に熱中し，概ね健全な生活態度を回復しています。

⑸夏休みからのＡ子

Ｂ男やC男，D男と遊んでいた時のＡ子は，それまでに見られた深夜徘徊は治まっていましたが，彼らがＡ子の元から離れると虚無感を味わいはじめたようです。夏休みまでは遅刻もなく登校していたのですが，夏休みに入り心のたがが外れたように８月には以前付き合っていた先輩と会うようになりました。その中で暴走族のW男と出会い２人は意気投合し，８月に起こした10回以上の深夜徘徊は，すべてW男と行動を共にしていました。

１学期に始めた私との会話ノートは夏休み中は途絶えていましたが，２学期の開始に伴い再開をしました。以前は私の質問にぽつりぽつりと答えるように書いていただけでしたが，再開したノートを見ると毎日の出来事を書くように変化していました。都合の良いことだけを書いているのどうかは判りませんでしたが，それはそれとして大きな変化です。時には私に質問をしてくることもあり，ノートを通して文字通り会話が始まりました。これまでもノートの提出は催促しなかったが，９月になってからは週１度必ず持ってくるようになりました。これは学級担任の指導によるものかもしれませんが，私にとっては褒める材料が増えたことなので大変うれしく感じました。

２学期が始まり順調のように見えたＡ子が，早くも１週間で無断欠席をしました。担任からそのことを知らされ，私は電話もかけずにすぐに家庭訪問をしました。玄関でチャイムを鳴らしても返事がない。窓は閉まっている。留守かと思ったがドアノブを回すと扉が開きました。大きな声で「入りますよ」と声をかけて家に入ると，Ａ子は蒲団の上で赤いブラジャーとパンツのままあぐら座りをしてシンナーを吸引していました。家の中はシンナーの臭いが充満していました。

「ダメじゃないの」と大きな声をかけてシンナーの入ったビニル袋を取り上げると，窓を開け放し扇風機をかけて臭いを追い出しました。Ａ子は抵抗もせずにとろんとした目で私を見上げ「ごめんなさい」と呟きました。壁にはＡ子が書いた「もう絶対にシンナーはやりません」という張り紙が貼ってあります。私は，５月の妊娠疑惑騒動で頑張っていた母親の顔を思い出しました。

裸同然の姿をしているＡ子に，私は無理矢理服を着せました。このようなときに男の先生だったら目のやり場にも困るだろうなどと考えると，以前女子の指導は苦手だと話した男の先生の理由が，理解出来るような気がしました。

夏休みを境にＡ子はまた以前のような遊び癖がつき，シンナー吸引や喫煙が常習化していきました。しかし，暴走族のW男と性関係をもってからは，「W男が好きだ。好きだからW男といっしょにいたい」と公言し，不特定多数の男性との性行為は行っていなかったそうです。

⑹Ａ子への指導

①会話ノート（交換日記）での心の触れ合い

１学期は，喫煙やシンナー吸引及び「性」に関してＡ子自身に見つめ考えさせることをねらいとしてノートを媒介にした指導を行いました。ノートは上手に活用すれば，Ａ子の実態を把握するためにも相当成果が期待できると思われました。最初は「書くのは嫌い」「書きたくない」と抵抗していましたが，『タバコを初めて吸ったのは，何処ですか』『タバコを吸ったときの気持ちはどうでしたか？』などと具体的な質問を書いて渡すと，次第に一行程度の簡単な内容ではあるがＡ子からの回答が記入されるようになり，行動の概要を把握する資料としても活用することができました。

９月からは，毎日の出来事などを日記風に書くようになり，内容は下校後の外出などの行動，家事の手伝い，W男に対する気持ちなどが綴られていました。時折『先生はこのことについてどう思いますか』などと書かれることもあり，徐々にではあるが心のつながりを獲得することができてきたように感じました。

②学級担任との指導連携

学級担任とは情報交換を密に行いました。また，指導の内容要領等を分担することとし，学級担任はあるべき姿（状態）を基準に厳しい指導を，生徒指導専任教諭の私はA子の理解者という立場で優しい指導（受け入れの指導）をすることとしました。このことは，A子にとっては学校の中に逃げ場をつくることになり，そこがA子の居場所にもなりました。何か心の揺れを生じた場合にはいつも校外へ飛び出していたA子でしたが，安心できる居場所を見出したことによって自分を見つめ考える時間が確保出来たようでした。

③学級担任による家庭支援（母親支援）

子どもの非行を一番心配して悩むのは，保護者でなければならない筈です。これまでA子の生活指導に全くと言って良いほど無関心であった家族を，学級担任が支援することで“親業”とも言うべき重要な仕事に目覚めさせようと努力をしていきました。またその間，病弱な母親に極力寄り添い，話し相手にも相談相手にもなっていきました。

妊娠疑惑が生じた５月にはA子を医者に連れていくなど積極的に母親としての顔を見せてくれましたが，自分の病気のせいか，或いはこれまでのA子との希薄な係わりからか，夏休みには10回以上の深夜徘徊があったにもかかわらず，「いずれは帰ってくるから」という安易な態度で探そうともしませんでした。学級担任が「家族がA子に関心を示すことの重要性」を説いていくうちに，９月20日の無断外泊では深夜まで兄が心当たりの場所を探しました。見つけることは出来ませんでしたが，A子に心配をしてくれる兄の存在を認識させるには効果的でした。さらに10月６日から数日続いた無断外泊では，母親が警察に保護願いを出しに行っています。明らかに家族の行動に変化が現われたのです。１学期は学校の呼び出しにも応じなかった両親が，10月には相談のために来校もしています。

④養護教諭による性教育

興味本位な性への関心はあっても健全な性の理解や知識は皆無であるA子に，養護教諭が個別に性教育を行いました。特に，中学生の未熟な体での妊娠や中絶による健康被害（危険性），さらに性病に関する知識などを映像を使ってしっかりと認識させ，女性としての生き方の指導を行っていきました。

⑤学校・警察連絡協議会での協力依頼

A子は，近隣の中学校間で結成している非行グループとかかわっているため，学校・警察連絡協議会において問題の情報を提供し協力を仰ぎました。警察関係は，所轄の生活安全課の職員と県警の少年相談保護センターの相談員が担当してくれました。

少年たちが在籍する各学校との情報交換から非行グループの動向が分かり，そこからA子の行動を予測することができるようになったので，予防的な対策をたてることもできました。A子の無断外泊があったときは他校の教員から居場所の情報提供を受けて，母親と共に連れ戻しに行ったという具体的な例もありました。

⑥小学校５・６年の学級担任との連携指導

A子の大好きな先生は，５・６年生の学級担任です。その頃のことを思い出して話すときのA子は，穏やかな表情になり楽しくてたまらないという顔をします。飲酒や喫煙，シンナー吸引，深夜徘徊，不純異性交遊などの問題行動により注意や指導を受けることが多い中学生活より，問題行動のなかった小学生時代の方が，思い出を語るだけでも優しい気持ちになれるのだろうと感じました。

そこで，A子の荒んだ気持ちを過去の良い時代を思い出すことで少しでも穏やかな気持ちの

回復に役立つと思い，小学校の学級担任との面談の機会を設けました。思い出話をするだけでも優しいA子に戻る姿を見て，当時の学級担任と直接会えば，A子は素直な気持ちになって自分自身を振り返ることができるのではないかと期待したのです。

5・6年の学級担任は既に定年退職をしていましたが，事情を話すと二つ返事で協力を申し出てくれました。面談する場所も中学校ではなく，小学校にしていただきました。A子は喜んで小学校へ出かけて行きました。面談の後は，しばらくの間穏やかな生活態度を見せました。月に1～2回程度の面談ではありましたが，私たちの現在の指導に対する間接的な効果は十分に期待できるものであったと感じました。

(7)「心に語りかける指導」を合い言葉に

A子の問題行動は，万引きや暴力，窃盗のような対外的な非行ではなく，飲酒，喫煙，シンナー吸引，不純異性交遊と遊び型の非行です。これがかえって「誰にも迷惑かけていないから‥‥」という安易な自己妥協で再犯に及んでいます。

A子へのきめ細かな学校の対応（(6)-①～⑥参照）はA子の家庭の在り方にも影響を与えることになりました。A子の家族は，学校の指導方針を理解し家庭でできる手だてを講じてくれました。家族で家事の分担，家族の団欒，外出したときの帰宅時間の制限など家族としての関係づくりを構築していったのです。するとA子も家族の一員としての帰属意識が生まれ，親との対話を取り戻してきました。

A子の指導過程で教員は，家庭支援の大切さや学級担任を軸とする指導体制の在り方，外部機関との連携，近隣校との情報交換など，多くのことを学びました。このどれもがA子の心に語りかける指導につながっていったのです。意識的にA子の心を揺さぶる指導などは難しいが，家族も教師もA子に対して常に関心を持っていることや，自分のことを思ってくれていることなどを感じたA子が，明らかに変容を示しているのを私たちは実感しました。言い換えれば，われわれおとなは常にその様な姿勢を維持していくことが，指導の大前提として極めて重要であることを学んだのです。

その後のA子は，従来の乱交的な性行為はなくなりましたが，W男とは別れられないとW男のあとを追いかけています。A子の親とW男の親は話し合いを持つなどの進展があり，W男は暴走族を辞めて父親の土建業を手伝うようになりました。私たちは，A子が卒業するまで性教育を含む生き方の教育を続け，社会通念等を学ばせながら総合的指導を継続することにしました。

4　学校は今

思春期の性の悩みは，その内容に個人差こそあれ本人にとっては大きな問題であると思われます。「どうしてニキビができるのだろう」「なぜ毛がはえてくるのだろう」「夜中にパンツが濡れてしまった」などの他人には言えない戸惑いから，「女性の裸体の写真を見るともやもやしてくる」「女性を抱いてみたい」「彼氏が欲しい」など性衝動を抑えるのに苦労しているものまで様々です。しかし，性行為が一部のマスコミによりファッション化されると，思春期特有の性行為に対する罪悪感は取り除かれ，「誰でもやっているから‥」と遊び感覚で性行動・性行為をエスカレートさせていきます。

かつて，女子生徒が性体験をすると通学カバンにカット絆を貼って，「私，傷物になりました（もう体験したから，誰とでもOKです）」という隠語で自己表明をしました。その意味を知らない中学生がファッション感覚で自分のカバンにカットバンを貼りました。そして，カットバンを貼った生徒たちは先輩たちに誘われていきました。「まさか中学生が‥‥，まだ14歳のあどけない女の子が‥‥」と戸惑っているうちに，学校の指導は後手後手にまわったのです。

今考えると，子どもの問題行動は流行に敏感に反応して推移していたのです。特に女子生徒は，性の体験から怖いもの知らずになり精神的な堕落に歯止めがかからなくなる傾向があります。

比較的早期に子どもたちを性の被害者や加害者にさせてはいけないと危機感を感じたのは，思春期の入り口の子どもたちをあずかる中学校の教師です。しかし，性教育が組織的・系統的に扱われるまでには紆余曲折があり，長い迷走の時間がありました。

(1)女子生徒への指導の苦手意識

問題行動を起こす生徒の指導について，男子と女子ではどちらが指導しやすいかと30代前後の中学校教師７人から聞き取り調査を行ったことがあります。30代前後の教員の多くは学級担任ですので，常時生徒の問題行動に直面し対応しています。そして，年齢的にまだ大きな役職（校長や副校長，主幹教諭等）を担っていないので本音が聴取しやすいことなどの理由があったからです。ただ，この調査で「‥‥は苦手だ」と表現していても聞き取り調査に協力してくれた先生方は，本音の呟きとは別に現場では第一線で生徒と向き合っている教師たちであることを付記しておきます。

①男性教師35歳‥男子の方がじめじめしていないので話して分かり合えるから指導しやすい。しかし同性ゆえに細かいところまで気になり，気詰まりになる場合がある。女子の性非行は指導しにくい。

②男性教師34歳‥男子の方が同性なのでその気持ちをある程度汲取れるから話しやすい。女子の性非行の指導は苦手。女子の非行は，上級学年になるに従い社会性の視野が狭くなり，物の見方や感じ方が短絡的，平板的，通俗的なものが幅をきかせているように感じる。

③男性教師31歳‥女子は感情の整理に手間がかかるので，男子の方が指導しやすい。身体的な問題については，同性の教師の方が指導効果があると思う。保護者の協力が得られない場合や家庭内の問題が原因で非行に走った生徒は，男女問わず指導しにくい。「女性はしとやか」といった社会通念が薄らいできた結果，今まで潜在的にあったそのようなエネルギーが顕在化して女子の非行が増加してきたと考える。

④男性教師27歳‥女子は根に持つところがあるように思われるので，男子の方が指導しやすい。指導については同性の方がやりやすいと思うが，同性だと対立した時に感情に走る嫌いがある。指導しにくいのは女子の性非行，その個人だけでなく周囲の生徒への影響は大きい。

⑤女性教師40歳‥指導に男女の差はない。個人をよく知っていると感情移入してしまい指導しにくいことはある。男子の問題行動の方が，これまでの経験から指導しやすい。女子の性非行は難しい。

⑥女性教師35歳‥女子は同性で指導しやすい反面，同性ゆえのやりにくさがある。男子が暴力で反抗してこなければ，男子の方が指導しやすい。指導について，同性より異性の方が良いところを見せようという気持ちが子どもにも働くようだ。同性だと開き直ることがある。家族関係が非行を起こす何らかの要因である場合は，教師の力が及ぶ限界があり指導しにくい。

⑦女性教師30歳‥女子の方が指導しやすいと思うが，言葉による指導が可能な場合は，男子の方が指導しやすい。女子が「どうでもいいじゃない，自分のことだから」と開き直ったときは指導が困難である。

上記の聞き取り調査からも，教師は従来の体験による指導から一歩も出ていないことが伺えます。特に性教育に対する考えは，男性教師，女性教師にかかわらず「中学生にはまだ早い」「寝た子を起こすな」「家庭で行うべきである」「教えなくても自然に覚える」との声が，まだ根強く残っております。これは，教師自身が組織的な性教育を受けたことがなく，たとえ必要だと内心思っても実践するには自信がないというところが本音だろうと思われます。また，性教育そのものを性器教育，あるいは性の生理現

象の知識を教えるところなどと誤解しているところも少なくないことも原因の一つとして作用しているようでもあります。

性教育は人間の生き方の教育です。自分が男性であるか女性であるかという事実を捉えながら，自分の行動や人間関係の築き方，また服装や言動などを左右していきます。このことは，自分の性別や性に対する知識は「自分が何のためにどのように生きるのか」「この時はどうしたらよいのか」などを判断したり行動していくときの条件になっていきます。すなわち，人間の性は人格の中心でもあるので性教育はごく狭い意味でとらえるのではなく，人間の生き方にかかわる性の様々な側面やその背景をとらえた幅広い性の概念に基づく教育でなければなりません。その学習の中で性の生理的な知識を学んだり，性に関する社会的な規範を学ぶ場としても重要な機会となってきております。

最近，「性同一性障害」の課題が学校現場の中にも浮上してきました。子どもの中に存在しても不思議ではありません。教員は，性教育においても新たな知識と認識を持って自信に裏付けられた指導に臨む必要があります。

⑵学級指導で取り扱って

私が中学３年生の学級担任のとき，学級内で「性教育」についての意識調査を行ったところ，子どもたちのほとんどが単に人間の性の生理的な知識を教わることだと思い込んでおりました。そして，「性」という言葉そのものが「いやらしい」という含みを持つ極めて性器を想像させるものでした。中学生になり「性教育」の授業は発達段階（学年別カリキュラム）に応じてすでに行われていますが，学級には幼児性を色濃く残した少年と，まだ中学生なの？と思わせる青年が混在しており，教育成果にもおおきなバラツキがあるという印象があります。しかし，「性教育」の内容そのものが正しく理解されず定着しない理由の一つに，この年齢の子どもたちは急速に向上する体位とともに性成熟度も発達し，社会の中に氾濫する性情報に強烈な刺激を受け，「性」の言葉だけで反応する相当数の者がいるということです。そして，性に対するモラルの確立されていない子どもにとっては，この刺激がおとなでは予想出来ないほどの大変危険で偏った方向に導くことがあり，中には性非行等で不幸な結果を招くこともあります。

そこで，性教育の基礎である「人間の生き方」にかかわる性の様々な側面や背景を，中学校を卒業する前にもう一度見つめさせ考えさせておく必要性を感じて，学級指導を行いました。

以下は，指導案の概要です。

①題材「性教育」

②指導目標

人間の性を，自然に豊かに受けとめる心情を養うとともに，男女が価値ある人間関係を築くようにさせる。

③指導計画

第１次：人間と性のかかわり〈本時〉

第２次：生命の連続性，性役割

第３次：性非行，性の病気

④本時の目標

中学生期の特徴を知るとともに，性についての学習が人格形成にとって非常に重要であることを理解させる。

⑤指導内容

ア　「人がら」

・人がらは作られるもの

（人間の基本的な行動様式は育った環境や学習によって形成されることを知る）

・性と人がら

イ　「人間の一生と性」

・シャインフェルトの7つの段階説

ウ　「異性との人間関係」

・好き嫌いの感情

・性欲の発現

・１対１と一つがい

・性の特質

エ　「異性との人間関係を持つときに必要なこと」

・マナー，エチケットの必要性

オ　まとめ

⑥評価

性についての学習が，人格形成にとって非常に重要であることを理解できたか。

⑦授業を終えて…生徒との雑談の中から

・男女で悩みが違うと思うから，性教育は男女別々にやって欲しい。先生を交えて分からないことや知りたいことを教え合うといい。私は，男女の付き合い方をもっと知りたい。

・普段，男の子とか女の子とか意識していないで話していたのに，体の違いなどを勉強すると何となく恥ずかしいし意識してしまう。

・もっといやらしいことを勉強するのかと思っていたけれど，全然違った。雑誌にでているような言葉の意味を教えて欲しい。例えば「避妊」「性病」「中絶」「ＳＥＸ」など。

・「堕ろす」という言葉の意味は分かるけど実際はどうやるのか。

・人間の生きがいも「性教育」に入るのか。

・男子にとっての女子の存在を知りたい。

雑談は，授業の後延々と続きました。私は時折「親や先生が，中学生の男女の結びつきについて嫌がったり叱ったり心配したりするのはなぜか」と問いかけながら雑談に加わり，子どもたちのクールダウンを図りました。

(3)視聴覚教材を活用した「性教育」

視聴覚教材は，鮮明なカラー画像で正確な知識が得られる等の利点があり教育効果は極めて高いものです。しかし，ある面では一方通行的であり，子どもたちにとっては受動的姿勢のため自ら考えるという態度を低下させる傾向があります。かつて視聴覚機器を授業に導入することを保護者に説明したとき，「個の進度差に即応できないのではないか」「見せっぱなしの授業では，教師との心の交流は生まれないのではないか」との危惧を指摘されました。実際の授業で「教材の与えっぱなし，見せっぱなし」はありませんが，そのような危惧を抱く親がいれば教師は意識してそれを払拭するための配慮を加えた授業をしなければなりません。視聴覚教材の選定理由，授業のねらい，期待される効果等を明確にし，適切な質問・助言を行うことで子どもたちの授業への関心が高められていくことを実際に保護者に示せば，理解されるでしょう。

特に，思春期の子どもへの性教育はややもすると単に興味と関心のみを育ててしまう危険性があります。専門性が要求され，より感動的な授業を行うには，専門家の手による良質な教材を活用する必要性は極めて大きいと思われます。また，その過程を通じて教える側の専門性も向上していくものと期待されます。

次に，視聴覚教材を活用して「受胎」を科学的に捉え，いのちの教育を３年生の授業で扱いました。以下は，授業及び授業後の生徒の感想をまとめたものです。

①授業のねらい「生命の尊さを知る」

②教材‥ＮＨＫ放映「受胎の神秘」

③教材を選んだ理由

ア　受胎そのものが新鮮な内容で描かれており，生命の尊さを学習するうえで最適な材料となる

イ　本教材は特に優れた撮影技術が駆使されており，かつ隠された世界が美しく拡大され印象的に描かれている

ウ　受胎までの過程，及び胎児が成長していく過程が神秘的に，また正確に表現され，解説も感動的で単なる性器教育に堕することなく，生命の尊さを重視した内容は中学生にも分かりやすく教材として非常に優れている。

④授業の流れ

ア　導入‥ＴＶを視聴するに当たっての視点，生命の尊さの解説

イ　展開‥ＴＶ放映

ウ　まとめ‥担任の助言，生徒の感想

⑤生徒の感想から

・たくさんの精子の中で受精するのはたった一つであること。その一番優秀なものが自分であるということ。
・受精したときに卵子がぐるぐる回り出した。まるで喜んで踊っているようだった。
・精子と卵子の受精が人間の初めだということが分かった。受精が遊び半分であってはいけないと感じた。
・体内で赤ちゃんは体を動かし，呼吸をしている。呼吸音が聞こえた。
・不純な交際をしない。明るい太陽の下での交際が望ましい。
・自分が生きているということは，何億分の一の確率で生まれてきたのだから，命を大切にし助け合って生きていきたい。
・大切な命を，自殺・中絶などで失うようなことをしてはいけない。
・長い間お母さんのお腹の中で育ってやっと生まれるのだから，大切にしたい。
・　生命は続いているものであって自分一人のものではない。自分も先祖から繋がっている命なんだ。
・自分としての生き甲斐を見つけて，それに向かって精一杯生きていきたい。

生徒の感想については，「一番心に残ったこと」「意外だったこと」「だいたい知っていたこと」「特に感動したこと」「これからの自分」などテーマを与えて話合いをしました。生徒は，映像の美しさと初めて見る体内の仕組み，受精の神秘的な光景に驚き，胎児の成長に感動したようです。そして素直に『自分ってすごい』『命って尊いもの』『生きるって素晴らしい』『命を遊び半分に扱ってはいけない』という感想を言葉にしました。専門家の手による良質な教材を活用する授業効果を，改めて感じた授業でした。

(4)性の逸脱行為，予防の視点で

性非行は，妊娠の問題や性病に感染していることも心配されますので，指導に当たっては心の指導とあわせて身体面の指導が不可欠になります。指導者も，女性の立場から相談ができるように，学校では女教師や養護教諭などの人的配慮も必要です。また，相手のあることなので事後の処理や心のケアのために，県警察本部の少年相談・保護センターに相談することもよいでしょう。

性の逸脱行為は，子どもたちの中では窃盗や暴行と違って「誰にも迷惑をかけていない」という幼稚な考えから罪悪感がありません。それどころか，男性にちやほやされるのを錯覚して自分は異性にもてるのだと自慢する子もいるほどです。かつて中学３年の女子生徒が２人で，どちらが異性にもてるか話し合っていました。そこにたまたま私が通りかかったので，彼女等は私にも聞かせたくて大きな声で話し始めたのです。話しの内容は，週に何回異性と関係を持っているかという，卑猥なものでした。内心驚いて詳しく聞くと，すでに病気の心配がありました。早速保護者の一人を呼んで話しをすると，母親はすぐには子どもの行動が理解ができずに「子どものことは母親の私が一番よく知っている。うちの子に限って‥‥」という例の言葉が飛び出しました。この子の両親は飲食店を経営しており，帰宅はいつも夜の11時頃になるそうです。「いつも，テレビを見ながら私の帰りを待っている子なんです」と話します。中学生の11時は，夜遊びをしても十分に帰宅できる時間帯だということを親は理解していなかったのです。子どもが親の帰宅を待っていればずっと家にいるものと思い込み，反抗しなければ素直なよい子だと思う，この親もそう思っていたようでした。もう一人の親は「私も昔はヤンキーでしたから」と，子どもの行動に対して物わかりのよい親を演じておりました。その後，学級担任や養護教諭とともに保護者や関係機関と協力して子どもの立ち直りを支援したのですが，親

夫婦の性意識が常識的なものであれば，子どもがいかなる環境に陥ったとしても，その子の立ち直りは予想を超える成果が期待されるということを感じました。いづれにしても，子どもは幼児期から親（特に母親）の影響を受けて，女性としての生き方や生命の尊重，人間としてのモラルの重要性などを身に付けてきたという長い歴史があることを認めなければならないと感じさせられました。

①性教育の質的向上と努力の方向性

- 教育課程に位置づけて，系統的に性教育を行う
- 体験学習を取入れ，男女の役割，思いやりなどを実践的に学ばせる
- 情報モラルを指導する
- エイズ教育を行う
- 必要に応じて個別指導を行う

②家庭（保護者）への協力・啓発

- モバイルを媒介にした性の逸脱行動などの情報を提供する（保護者会などで啓発する）
- 母親は次代の女性のモデルであり，その役割は重要であることを発信する
- 学校が行う「性教育」の内容を保護者にも提供し，理解してもらう
- 問題行動を起こす子どもの親の相談・支援を行う

③地域社会への期待

- 好ましくない環境地区の浄化を図る
- 安全で安心な地域をつくる運動への推進
- 暗がりや危険な箇所の改善を図る
- 学校とともに児童生徒の健全育成に尽力

5　まとめ

学校における性教育は，昭和20～30年代は「純潔教育」という言葉が使用されていました。現在用いられている「性教育」と同意義と考えて大きな差異はないと思われます。昭和40年代になると「性教育」と言う用語が学校教育の中に登場し，単に男女の身体的な機能や性行動の意味ではなく「生き方の教育」「人間教育」という方向性をもって用いられることになりました。その後，これまでの中学校の保健の分野から全教科・領域において組織的・計画的に取り扱う内容となり，その教育の対象は小学校まで拡大します。

しかし，世間一般には性教育を学校で行うことについて「寝た子を起こすな」「性指導は家庭の問題である」などとの意識が根強く，教員の中にも「性教育は大切だ」とする総論は賛成であるが，「担当するのは教員ではなく専門の先生が指導して欲しい」という各論反対に近い無責任な雰囲気が蔓延しておりました。それは，「性」に触れることがタブー視されてきた長い歴史のなかで，学校の場で取り上げることへの戸惑いや不安，また「男子」への指導に比し「女子」への指導を行うことの難しさや苦手意識が加わったものと考えられます。

昭和60年前後から急速に「女子非行」が増加し，教員も女子生徒への指導が苦手だなどと言っていられなくなりました。さらに平成に入ると「エイズ」問題が浮上し，性教育の早急なる充実が不可欠となってきました。また，この頃から異性への接触欲，いわゆるさわりたい・抱きしめたい等と思う気持ちがこれまでは圧倒的に男子に強く現れていたのが，個人差はありますが女子にも見られるようになりました。以前は女子は接近欲，いわゆる一緒にいたい・二人だけで話をしたい等と思う気持ちで止まっていたものが，大きく変化したことが感じられます。

このことは今のところ女子生徒の一部の者に見られる傾向ではありますが，集団になると臆面もなく「性交」を話題にし，その集団のメンバーの中には「性病」を心配して相談に来たことからも，実態は私たちの想像を超えたものであることを察することができます。

さらに近年，携帯電話の普及で性に対する考え方そのものが様変わりしてきました。「愛があれば，性交までいってもかまわない」とな

と「愛」で歯止めのあった若者も今は昔，出会い系サイトで知り合った不特定の相手と売・買春が行われるようになり，性を快楽の道具として或いは商品として考える若者が激増しています。善かれ悪しかれ科学の発達はこの分野にも及び，おとなが知恵を絞って出会い系や有害情報を遮断しても激流を止めることはできず，非出会い系のなかから同じような目的を持った内容のサイトが生まれ，いたちごっこの状態です。

子どもたちは「学校裏サイト」や「プロフ(プロフィール)」に群がり，そこで発信されるわいせつ情報や刺激的な情報が飛び交う環境の中にそのまま放り出されているのが実態だと思われます。「インターネットナンパ被害」という言葉が生まれているように，そこは危険が満載されているのです。そして，犯罪にまで発展するケースもますます増加することは誰の目にも明らかです。

この目まぐるしく変化する社会環境のなかで，「性」についての教育は学校が行った方がよい，いや家庭教育の問題だ，社会教育がやるべきだ，いやこれらの教育力は著しく低下している現状を課題にすべし‥‥等，言葉だけの争いの時は既に去ったのではないでしょうか。そうでなければ学校が時代の推移に取り残されて，ますます指導が後手に回ってしまいます。まずは子どもたちの置かれている環境や実態を一番知っている学校が実状に合わせた指導を行うとともに，家庭や地域社会へも実態を発信して，関係者が協働で子どもの健全育成に努め，彼等が人間的な生き方を学ぶことができるように支援することが重要なのではないでしょうか。

かつて，中学３年生の男子生徒２人が小学２年生の女児を強姦した事件がありました。女児は出血がひどく，３日間入院をしたそうです。男子生徒は逮捕されて警察で取り調べを受けていましたが，学校にひとまず返されるとのことで，私は該当生徒の保護者といっしょに学校で待機していました。やがて一人の生徒が現れたとき，その母親は自分の息子の姿を見るなり飛びかかって息子を撲ちながら「何てことをしたの，取り返しのつかないことをして。いっそあなたを殺して私も死にたい」と言いながら泣き崩れました。少し遅れてもう一人の生徒が戻ってきたとき，その生徒の母親は「まだ小さいから，そのうち忘れるわよ」と息子にそっと呟きました。後者の母親の言葉の真意を，私はその時尋ねることもしませんでしたが・・。その後，二人の生徒の行動に大きな差異が出てきました。子どもは親の影響を受けながら，成長していくものです。したがって，親に寄り添い共に子どもを育てることができる教師が必要なのです。

特にモバイルを媒介にしたあらゆる犯罪が社会問題となっている現在，学校教育のなかでの組織的な努力は，生徒が性犯罪や性被害にかかわることを防ぐ最も効果的な手だてでもあります。学校は，社会全体に対しこれらを積極的に発信する極めて重要な役割をも担っていると思っています。